

畠山：「森は海の恋人」

「森は海の恋人」

畠山 重篤

(牡蠣の森を慕う会代表)

1. はじめに

陸中海岸国立公園の玄関口に位置する気仙沼湾は全国的にも稀にみる天然の良港である。北側には唐桑半島が突き出し、湾口は、緑の真珠と謳われる大島が、太平洋の荒波を受け止めている。海が深く波静かで夢のような内海である。

1611年（慶長16年）11月27日、スペインの対日使節セバスチャン・ビスカイノはこの地を訪れた折、天恵のこの湾を見て、彼の旅行記「金銀島探検記」に、「此港は、是れまで見たる中、最良なるもの一つにして…」と記しているほどである。

遠洋漁業の基地として有名であるが、天恵の養殖漁場でもある。カキ、ホタテ貝、ワカメ、コンブなど、約20億円の安定した生産がある。

2. 牡蠣の目で森をみる

私はこの気仙沼湾の一隅、舞根湾^{もうね}という小さな入り江で牡蠣の養殖業を営んでいる。早いものでかれこれ37年が過ぎてしまった。3年前の春から長男が跡を継ぎ、親父、私、息子と、三代牡蠣屋が続くことになった。

話は少し遡るが、20年ほど前から同業者が集まると、果たして次の世代にこの仕事を継がせていいのか、という話題が語られていた。皆、そろそろそんな年代に差しかかっていたのである。昔に比べて確かに牡蠣の成長

は悪くなった。特に、昭和40年代には、気仙沼湾奥に赤潮が発生し、風や潮に乗って外海に近い私達の漁場まで到達するようになった。白いはずの牡蠣の身が赤くなるなどの被害が続出し漁民は苦境に立たされた。

その後、下水道の整備、水産加工場などの排水規制が強化され、一時期よりは見た目のきれいさは保たれるようにはなった。しかし、私には、どうも気になることがあった。それは、子供の頃から遊び相手であった干潟や磯に棲む、ヤドカリ、タツノオトシゴ、エビ、カニなどの小動物が激減してしまっていることである。

そんな時、フランスの牡蠣産地を視察する機会を得た。実はフランスと宮城県は牡蠣を通して切っても切り離せない関係にあるのだ。

3. 宮城種

牡蠣の種苗が採れるところは日本に2カ所しかない。広島と宮城である。30年前フランスの牡蠣に病気が蔓延し牡蠣が死んだ。そのとき輸入したのが宮城種だったのである。それ以来、フランスで養殖されている牡蠣は宮城種が主流になっているのである。

干潟の差が大きい大西洋沿岸では、牡蠣を干潟にバラ蒔いて養殖している。私はロワール川河口の潮溜りにうごめく小動物の群れに出会った。それは、子供の頃見た宮城の海の

光景そのものだった。そしてロワール川の生物を育む力と、上流の広葉樹の大森林地帯の存在を知った。森は海をも支配していたのだ。

4. 大川と気仙沼湾

世界的な牡蠣の優良種である宮城種は、日本でも有数の大河、北上川河口で生産される。日本一の牡蠣の産地広島が太田川河口であるように、牡蠣と川とは密なる関係にある。気仙沼湾も例外ではない。母なる大川が気仙沼湾の生物の生産を支えているのだ。しかし生産者も行政も、このことの重要性をよく把握していないのである。

大川を遡って川を取りまく環境を調べてゆく内に、森と海との間に驚くべき計画があることを知った。河口からわずか8キロ地点の狭窄部を、幅425メートル、高さ62メートルのコンクリートの壁で塞ぎ止めようという新月ダム建設計画である。ダム計画は森林破壊を伴う。周辺の開発計画で、何百haという森林が消える運命にあるというのである。今までの全国のダム計画がそうであったように、海の生物生産と川との関係は全く考慮されていないことに気がついたのだった。

早速海で生きる養殖業仲間に森や川に目を向けてもらわないと大変なことになると話しかけてみた。すると、「今まで気がつかなかった。下流に住んでいて森の恵みを受けっぱなしの漁民が上流の人々に何か恩返しをしなくちゃいけないね」という意見が出されたのである。そこで、上流の森を守っている人々に感謝の念を込めて漁民による森づくりをしたらどうだ、ということになった。

大川は気仙沼市を貫いて海に注いでいるこの地方最大の川である。私達は気仙沼市の隣からくわの唐桑町の住人である。しかも大川の源流

は、岩手県室根村である。室根村を訪ね、村長さんに漁民の想いを伝えると、はじめげんな顔をされていた。しかし話を詳しく聞くに及んで、こう仰られたのである。「今まで下流の気仙沼市からは、川を汚さないでくれ、とばかり言われてきた。それなのに、大川の水を直接飲料水に使っている訳でもない唐桑町の漁民が、上流の民に感謝の言葉を伝えてくれ、しかも、木まで植えてくれる。こんな嬉しいことはありません。協力しましょう」。

5. 山に翻った大漁旗

1989年（平成元年）9月、岩手県室根山に、時ならぬ大漁旗が翻った。そこには森の民の手助けを受けながら、馴れない手付きで木を植える大勢の漁民の姿があった。植林はその後毎年続けられ、今までに約2万5000本の、ナラ、ブナ、ミズキ、トチ、キハダ、カツラなど50種以上の広葉樹が植えられた。はじめに植えた木はもう、大人の背の高さをとくに越え、スクスク育っている。秋には葉を落とし、落ち葉はやがて腐葉土となり、雨が降る度に森の恵みを海に注いでいるのである。心なしか海も着実に元気を取り戻しているように思う。20年来姿を消していたメバルという小魚が戻ってきたのである。

6. 森の民と海の民との交流

毎年の植林を通して、森の民と海の民との交流が始まった。夏、子供達を連れて海水浴に来た人達を海に案内し、養殖筏に連れて行って、生きている牡蠣や帆立貝を見せたり食べてもらったりした。「生まれてはじめて見ることができました」と驚いている様子を見て、海からわずか20キロしか離れていない森の民と海の民の距離がいかに遠いものかを

島山：「森は海の恋人」

感じた。

秋の収穫を終えた頃、村祭りへの招待があった。海の幸を持参してきて、村の人々に販売してほしいという要請もあった。村祭りの当日、トラックに海の幸を山のように積み込み、お祭り広場で原価で販売した。海の幸はたちまち売り切れとなり、売上代金は感謝を込めて室根神社に奉げたり、野菜や果物を買ったり、ニゴリ酒をご馳走になったりして、楽しい一日を過ごした。

7. 環境教育へのアプローチ

春になって新学期が始まると、室根村の学校の子供達を海に招いて、体験学習をしてもらおうと計画した。海水浴に招いた折、海の生物と触れて、驚きと喜びの交錯した顔を垣間見ていたからである。

新緑に映える5月、森林組合のマイクロバスに乗って室根村の小学校6年生50人がやってきた。引率の先生方やPTAの役員の方々の顔も嬉々としている。挨拶をすませると早速ホタテ貝の養殖を体験してもらうことにした。

まず長いテーブルの上に、7センチほどに成長したホタテ貝の子供を3000個山積にした。パクパク音を立てて口を開閉している生きている貝に触れて大騒ぎである。ワー、手をはさまれた、ワー、カスタネットみたいと、それは賑やかであった。貝にはドリルで穴が開いているので、ロープについているテグスに一個一個結んでいく作業をさせた。

次に全員を船に乗せ筏に連れて行った。一人一人にロープに結んだホタテ貝を海に下げる作業を手伝わせた。こうやって下げておけば、餌も肥料もやることなく貝が育つことを説明すると不思議な顔をしている。プランクトンネットを引いて、ネットの底にたまっ

たものを陽にかざして見せるともやもやしたものが見える。

陸に戻り顕微鏡で見せると、一滴の海水の中に、さまざまな形をしたプランクトンがうごめいていて、これを貝が食べて育つことを説明した。そして、この植物プランクトンが育つ養分が、室根山から大川を通してここまで届いていることを話すと目を丸くして聞いていた。浜のお母さんが炊いた、ホタテごはんをお腹いっぱい食べて子供達は帰っていった。

やがて子供達から体験学習の感想の作文が届いた。森と海がこんなに結びついていたことの驚き。上流に暮らす人が川を汚すと、海の人々が困ることを知ったこと。そしてクラスで話し合ったことは、朝シャンで使うシャンプーの量を半分にしたこと、お父さんに農薬をなるべく使わないようお願いしたことだということである。下流の海で生きる者にとって、この作文ほど価値のあるものはないと思った。つまりこのことは、水環境を守るには、川を仲立ちとして、上流、中流、下流と、川の流域に暮らす人々がそれぞれの立場の人を想い合う心を育てることだと気がついたのである。

体験学習の噂は広がり希望する学校が増え出した。仕事の合間にどう受け入れるか相談を重ねた。そして今では、比較的時間の取れる5月から9月上旬までに約500人の子供達を受け入れている。この9年間に4500人を超す子供達を受け入れた。

1995年（平成7年）には体験学習用の船も造った。本格的な木造和船で四丁櫓で漕ぐ。海の文化の伝承と森と海とのつながりを教える格好の教材となっている。とうとう海辺に小さいながら教室までつくってしまったのである。

今、気仙沼湾に注ぐ岩手県室根村から流れる大川流域の環境は確実に一步一步改善されている。川にウナギが少しずつ戻り、海でも姿を消していた小魚が姿を見せるようになった。人の気持ちが変わる時、自然は正直に反応してくる。人の気持ちをゆさぶるもの、それは代償を求めないボランティア以外にない。

8. 環境教育で村おこしを

漁民が山に木を植えている。なぜ漁民が山へ……。 「森は海の恋人」のテーマに誘われ教育の現場でこのテーマを取り上げたいという学校からの問い合わせが引きも切らない。気がついたことは子供達を海に招き、直に接してみても子供達の心に本物の自然と触れ合った感激がいかに浸透していることである。この辺境の地こそ環境教育の絶好のフィールドなのである。しかも、20キロ以内に、森も川も海も揃っているではないか。このことは、体験学習型修学旅行の絶好のコースとなる。ゆっくりとしたペースだがこの構想は動き出している。

5月には仙台の中心部に位置する中学校の2年生200人が大島で2泊のキャンプをすることになった。海辺で楽しいキャンプをして帰るだけでは教育的に物足りなさを感じるから何か体験させてもらえないかの相談を受けた。

そこで室根村と相談をし、200人全員に広葉樹の植林をさせることになった。山頂からは気仙沼湾が見渡せるので、ここに植えた木が海の生物生産にも重要な関わりがあることを説明する。そして、大川の清流を見せ、最

後に海での体験をさせれば生態系という広範囲な学びが得られると思うのである。体験型修学旅行の打診があちこちから殺到している。

学校だけではなく、大人のグループ旅行の希望もあり何回か受け入れた。木を植える行為を通して、少しは地球にやさしいことをしたという満足感と、美味なる山海の幸を味わえる旅は、都会人にはこたえられない魅力なのだ。

最後に最も大切なことは、子供から大人まで何に心を打たれるかということ、汚れのない森、川、海であり、自然を愛し慈しもうとしている人々との触れ合いである。

つまり、森から海まで川の流域全体に住んでいる人々の意識をどう変えるかが問題なのである。逆からいえば、自然が豊かであればあるほど、自然を愛する住民が多ければ多いほど、魅力的な田舎になるのである。まず人づくりをすることである。せっかちに道路や箱物を造っても魅力の薄れた地域になるだけである。

国土庁主催の農村アメニティーコンクールで1997年（平成9年）室根村が全国一位となった。これといった施設のある村ではない。だが、村民の意識に頭が下がる。子供達は下流に迷惑をかけられないと歯みがき粉の量まで注意して生活しているのである。こうして、まず人をつくり、それからゆっくりハード計画に取り組んでいくような地域にこそ光が当てられるべきである。

（はたけやま・しげあつ 牡蠣養殖業）